

メディアとしての女性

——吉屋信子『戦禍の北支上海を行く』におけるシャンハイ・イメージ——

徐 青

要旨：本稿では、1937年7月7日盧溝橋事件直後、日本の大衆作家吉屋信子が上梓した単行本版『戦禍の北支上海を行く』を基に、いわゆる「日中戦争」下における日本女性の上海イメージはどのようなものであったのかについて検討する。とりわけ、日中全面戦争開始と同時に、それまで軍部との直接的な関係をもたないでいた、吉屋信子のような多くの作家たちが、新聞や雑誌のジャーナリズムの側からレポーター、特派員となって戦場へ赴いたということに着目しておくことは、きわめて重要であろう。日中戦争期においても、最初に戦争をセンセーショナルに扱ったのはメディアであり、作家たちは戦争に言葉を与えてイメージ化していった当事者であったことを、吉屋のこの作品は端的に表象している。

I. はじめに

吉屋信子（1896年1月12日—1973年7月11日）は大正・昭和に活躍した日本の女流大衆作家である。女学校時代、新渡戸稲造の演説からさまざまな影響を受けたが、とりわけ、その「良妻賢母となるよりも、まず一人のよい人間とならなければ困る。教育とはまずよき人間になるために学ぶことです」という新渡戸の話に感銘を受けて、少女雑誌に短歌や物語の投稿を始めたという逸話はよく知られている。

先行する吉屋信子研究は、大きく分けると次の四領域となる。すなわち
1. 評伝、2. 少女小説を中心とするレズビアニズム論、3. 通俗小説論、

4. 戦争責任論である。

戦時下女性作家たちの文学における「戦争責任論」の領域では、すでに岡野幸江・北田幸恵・長谷川啓・渡邊澄子編『女性たちの戦争責任』、都築久義『戦時下の文学』、若桑みどり『戦争が作る女性像』、高崎隆治『戦場の女流作家たち』、『上海狂想曲』等がある。ここではまず、北田幸恵の整理しているところなどに依拠して（北田 2004, pp. 136-137）、この「戦争責任論」カテゴリーについてどのような議論が存在するのかについてみておくことにしよう。

従来 1938 年 8 月に内閣情報部から武漢攻略戦従軍、いわゆる「ペン部隊」への参加を求められ、文学者たちが応諾した時点は、「戦時下文学の重大なエポック」として位置づけられている（『戦時下文学の周辺』風媒社、1981 年）。戦争文学研究者の高崎隆治は、「ペン部隊」二十二名の「紅二点」、海軍班吉屋信子と陸軍班林芙美子の参加について、「この二人を先駆として、以後、女性作家たちは軍の要請を受けて、つぎつぎに戦場視察を行うことになった」として、女性作家の戦争協力の「起点」としての責任を追及している（『戦場の女流作家たち』参照）。

その前年の 1937 年、吉屋の主婦之友特派員としての従軍記録である『戦禍の北支上海に行く』が出ている。この作品は戦争や戦場に対する社会的・思想的視野や思惟回路が欠如しており、自身の在り様、文学観を根底から再考すべき場面に立ち会いながらもその機を逸しているとされている（北田 2004, p. 137）。

『戦禍の北支上海に行く』をめぐっては、「時局追隨」、「本質から外れた勧善懲悪主義」、「侵略戦争への視点の欠如」、「抑制のない詠嘆と叫びが目立つ」と論評し、ペン部隊の報告も「さしたるものを残していない」という批判（亀山 1981）があるが、戦時下の吉屋の言説を発掘し、吉屋の戦争責任を今日的視点から追究したもの（渡邊澄子「戦争と女性 太平洋戦争前期の吉屋信子を視座として」『戦時下の文学』、「戦争と女性——吉屋信子を視座として」『大東文化大学紀要』）や『戦禍の北支上海に行く』収録の

『北支上海現地報告』を中心に、「報告する主体」を形成しつつ「戦場と銃後の女性を媒介する役割」を果たした吉屋信子を追跡したもの（金井景子による『報告が報国になるとき——林芙美子「戦線」「北岸部隊」が教えてくれたこと』）などもある。

田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子』上下二巻（1999年9月、朝日新聞社）は、資料を駆使した詳細な吉屋信子評伝であるが、その吉屋の戦中の評価などに関しては重要な問題を孕むものとなっている。田辺は「女性史研究家には往々にして、現代感覚で歴史を裁く考え方もあって当惑させられる」と言い、十五年戦争を「業のようなもの」「なだれこまずにいられぬ」宿命とし、戦争加担への批判を「短絡思考」「のんきな発想」と断定する。また、「昭和十八年に入ると信子も執筆の場もなく（用紙の統制で、雑誌の廃刊・統合も多い）そのひまさえなかった」「どちらを向いても戦意昂揚文学・映画ばかりであった。信子にはそういうたぐいの作品の筆はとれない」と、時局から自立した吉屋の文学精神の現れを評価している。

林芙美子作品において「上海」が一定の明確なイメージをもつケースもあるが、一般に「女流」作家の、かつて戦場だった「上海へのイメージ」について考察されることはあまり多くない。高崎隆治『戦場の女流作家たち』と『上海狂想曲』、そして和田博文他『言語都市・上海 1840-1945』の「吉屋信子」に関わる章が多少触れているだけであり、「吉屋信子の上海体験」そのものについての研究はまだ空白状態だといえる。

研究方法論的にはさらに検討の余地はあるが、戦時下「女性」作家たちの「上海」イメージという観点から「吉屋信子の上海体験」を考えていくとどうなるのか、本稿の主題はそこにある。

そもそも、近代日本の人気女流大衆作家吉屋信子はいったいどのような機会に、戦時下の上海へ出かけたのか。まず当時の日本社会の状況や国際情勢を確認しておこう。

II. 『主婦之友』の時代的位置と役割

II-1. 雑誌の平均総頁数, 刊行状況, 値段, 出版社, 発行人等

吉屋のルポルタージュが掲載された『主婦之友』は、1917年主婦之友社から創刊され、創刊当初から家庭生活に密着した実用記事が中流主婦層に支持されてきた、日本の代表的な主婦向け雑誌として戦後も発行された一大女性雑誌である。実用記事・娯楽記事をあわせもつ誌面構成は、後の日本の主婦雑誌の原型となり、つねに時流に敏感に反応することによって、大量の発行部数を維持してきた。日中戦争期の『主婦之友』は総頁各号通常500, 600頁程度、毎月一回発行で定価60銭であった。

主婦の友社の創業者は石川武美である。彼女によって昭和22年に女性専用図書館が創設されたことも有名で、この女性専用図書館が現在のお茶の水図書館である。

当時のこの雑誌の性格について、北田（北田2004, p. 139）は次のように概括している。

『婦人雑誌からみた1930年代』（私たちの歴史を綴る会編、同時代社、1987年）によると、『主婦之友』は1930年代前半においては比較的戦争熱を煽る記事は多くないが、1934年頃から軍国主義を助長する記事が多く載りはじめ、翌35, 36年と戦争にかかわりを持った記事が多くなり、日支事変後の37年9月から直接的な戦争記事が突然多くなる。「1930年代（昭和5年～15年）は、満州事変勃発から盧溝橋事件をきっかけにした中国との全面戦争を背景に、この本の内容も次第に、婦人を無知と無批判の状態に沈殿させ、自然に支配的なものに追従させるものになっていった」。吉屋信子は1936年7月号同誌に『戦艦比叻便乗記』をのせているが、吉屋が戦争に本格的にコミットしていく分岐点はやはり『主婦之友』の専属作家として契約を結んだ1937年4月以降、中国との全面戦争に突入していく時期であり、十五年戦争の

半ばである。……同年7月、日中戦争開始。8月、国民精神総動員実施要綱が決定され、10月国民精神総動員中央連盟が発足する。『主婦の友』『婦人倶楽部』『婦人公論』『新女苑』『輝ク』など女性誌はいっせいに時局に呼応して戦時色を打ち出す。なかでも『主婦の友』は当時、最大部数を誇るメディアで、女性読者への影響力において他を圧していた。

ここから類推すれば、吉屋のルポルタージュは当時の日本女性の中国認識を大きく左右していたことが分かる。「女性読者」なるものが、大衆化しつつある当時の日本社会でどのような機能を果たしていたのか、それ自体の検証が必要ではあろうが、ここでは吉屋の影響力自体について、さらに検討しておくことにしよう。

II-2. 吉屋信子と『主婦の友』誌

まず、『主婦の友』と吉屋との関係はどのようなものだったのか。吉屋は41歳の時に執筆に忙殺されて体調を崩したことから、『主婦の友』と専属契約を結んでいる。吉屋は『主婦の友』の専属記者であり、『主婦の友』目次集成を調べると彼女の寄稿数は際立って多い。

吉屋信子の『戦禍の北支上海に行く』は、日中戦争勃発直後に書かれたものである。昭和12(1937)年、専属契約を結んだ主婦之友社の特派員となって、8月25日から9月1日まで「北支」⁽¹⁾へ、9月22日から10月3日まで上海へと、二度、戦禍の中国に渡っている⁽²⁾。何れにせよ、その特派員としてのルポルタージュが「戦禍の北支現地に行く」(『主婦の友』⁽³⁾10月号)、「戦火の上海決死行」(同11月号)であり、本節に取り上げるもの

(1) 吉屋信子の「北支」行きは主に天津、通州、北平(北京)への旅であった。

(2) もちろん、それ以前にも欧州への旅に際しては、上海を経由しているはずだが、詳しくは未確認。

(3) ゆまに書房から、戦前期四大婦人雑誌『婦人公論』『主婦の友』『婦人画報』『婦人倶楽部』目次集成が発行されている。

は、これらに特派員経験をもとにした講演会記録を加えて11月8日に新潮社から刊行されたものである⁽⁴⁾。実に素早い発行である。

前年からこの年にかけて連載された長編『良人の貞操』の圧倒的な好評により、吉屋信子はその作家的地位を不動のものにしたことはよく知られており、主婦之友社が彼女を「主婦之友皇軍慰問員」に選んだ理由も、女性層に最もアピールするプロの書き手として、余人に変えがたいとの判断に基づくものだが、戦場の現実を目に当たりにすることで、吉屋信子の中には、視る・感じる主体としての「女」——「吉屋信子」という有徴の固有名詞ではない——が立ち上げられてゆく(金井2004, pp. 84-85 下線強調引用者)。

さらに、主婦之友社が主催する「北支・上海現地報告大会」で吉屋が女性ばかりの聴衆らから二十六回の「笑い声」を引き出したことは、「吉屋のことばが、時局の認識を一方的に促すような悲憤慷慨調とは程遠い、聴衆と等身大の極めて親和的なものとして語られていることを示している」(金井2004, p. 84)。

吉屋は『主婦之友』1937年11月号では、「皇軍慰問の手紙募集」という次のような記事も書いている。

この度、北支、上海の現地に参り、親しく戦地にて、『主婦之友』愛読者の皆様に代つて、皇軍慰問のお役を及ばずながら果して帰りましたが、戦地の方達は、銃後の女性が朝夕に戦線の我軍の労苦を偲んで、神かけて、その御健勝を祈つてゐるといふことを、どんなに心嬉しく感じてみられるかを、しみじみしました。

この度、主婦之友社は、恤兵部からも、皇軍慰問には銃後の女性の

(4) 専属契約を結んだ主婦之友社の特派員として書き上げたり講演したりしているものを、なぜ新潮社から出版できるのか、不思議であるがここでは問わないでおく。

心からの感謝慰問の手紙を送って戴きたいと伺ひ、その企てをなさるとのことです。

あゝ、銃後の女性の優しい心！ これこそ、祖国から戦陣へ送る形なき慰めの花です。読者の皆様一人々々が、一筆なりと二筆なりと、北支、上海前線の勇士達への、感謝の言葉を心をこめて書き綴つて、お出しになつたら、それこそ、御自身現地へいらつしやれずとも、立派に誰方でも皇軍慰問がお出来になると思ひます。優しき水茎の跡一通——どんなに陣営の燈影に、なつかしく読み返されて、勇士の胸を柔げるでせう。

また、手紙募集「規定」も細かく書いてあり、さらにそのページの下の部分には、太々と書かれた東京、大阪会場による「北支・上海現地報告大会」の、吉屋信子女史・田中比左良画伯による、「聞け！！ 愛国熱血の大獅子吼生々しい硝煙の現地大報告・入場は婦人に限る、入場無料！！」という宣伝がある。このように、吉屋の上海ルポが出版される以前から、すでに『主婦之友』に記事として掲載され報告会も開かれていたのである。

ところで、1937年に発表された『良人の貞操』は、当時あまり問題視されていなかった男性の貞操をめぐって議論を巻き起こしたのだが、彼女が北支と上海に渡ったのも、ちょうどその直後であった⁽⁵⁾。

1937年7月、日中戦争が始まると、進歩的・文化的なエリート女性たちの多くが、戦時体制に巻き込まれてゆく。同年8月、政府は国民精神総動員運動を閣議決定し、国民精神総動員中央連盟に愛国婦人会・大日本国防婦人会・大日本連合婦人会（体制側三婦人会）が参加する。1938年2月、同連盟の調査委員会は「家庭報国三綱領・実践十三要目」を公表し、家庭

(5) 当時、朝日新聞社の飛ばした神風号が東京・ロンドン間の飛行時間の新記録をつくって話題をよんでいたが、「良人の貞操」の人気はこの神風号ブームにも対抗できたとさえいわれた。彼女は新聞小説作家として大きく評価され菊池寛とともに双璧と称された。」尾崎秀樹「吉屋信子」『国文学解釈と鑑賞』1985年9月号)

を通じて女性に戦争協力させる政策を図った。

他方、日本基督教婦人矯風会・婦選獲得同盟などは非常時局打開を目的に日本婦人団体連盟を結成したが、久布白落実や市川房枝も、女性の利益実現のために国民精神総動員中央連盟の調査委員に就任した。政府は、労働力不足を女性で補うべく戦時動員を図る。1938年4月、戦争遂行のための人的資源、物的資源を総動員することを目的とした「国家総動員法」を発令する。女性にはまた、人口増加政策が次々と図られ、早婚多産が奨励され、傷痍軍人の妻になること、満州開拓民の青年の妻、すなわち大陸の花嫁になることが奨励された。また、1938年1月、厚生省が設置され、人口増殖政策とむすびついた国民の体力向上策が図られ、保健婦の育成に力が注がれた（岩淵 2005, pp. 176-177 参照）。

吉屋は昭和初年からの多作による過労から、胆石の発作に悩まされていて、「思い切った節筆を決意」（朝日新聞社版『吉屋信子全集』年譜参照）して、主婦之友社と専属契約を結んだとされているのだが、この選択が、結果的に吉屋を書斎から戦禍の現場や前線へと引っ張り出すこととなった。

一大女性雑誌であった『主婦之友』は、昭和12（1937）年7月7日の盧溝橋事件に始まる日中戦争へと大衆を動員していく役割を、積極的に果たしつつあった。事変直後の9月号には「北支事変大特輯」を組み、出征軍人の妻と母に家庭の守りを説く愛国婦人会会長の訓話、西條八十の詩「通州の虐殺⁽⁶⁾ 忘るな七月二十九日」、同じく西條らによる「銃後の女性軍詩画行進」⁽⁷⁾などを掲載している。この「通州事件」はよく「第二の尼港事件⁽⁸⁾」と呼ばれ、その後の済南事件⁽⁹⁾と繋がっていくが、事件の起こった

(6) 通州事件とは、1937年（昭和12年）7月29日に発生した事件で、「冀東防共自治政府」保安隊（中国人部隊）による日本軍部隊・特務機関に対する襲撃と、それに続いて起こった日本人居留民（朝鮮系日本人を含む）に対する虐殺を指す。なお、中国側ではむしろ「抗日蜂起」と看做している。

(7) 「出征」「千人針」「女子軍事教練」「陸軍省の交換嬢」「軍需品工場の女性」「慰問袋」「留守宅」「陸軍病院」「在支国防婦人会の活躍」と言った詩を西條八十が書き、宮本三郎と嶺田弘が画を添えた。

場所は何れも中国の領土であった。

続く10月号、11月号は、吉屋信子の長編ルポがハイライトであった。写真、絵画、挿絵によるヴィジュアルでモダンな紙面で戦争熱を鼓吹する中、他の男性作家、記者、軍人にはない、人気女流作家独特の視点や感覚によって戦場の生きた「現実」を銃後に伝えることが吉屋には期待された。吉屋もまたそれに意欲的に応えることになった（北田幸恵の「解説」に拠る）。

『戦禍』は三部に分けられている。「戦禍の北支現地に行く」、「戦都上海行」そして「北支上海現地報告（講演筆記）」である。本来は、当時の雑誌そのものを使い、「写真、絵画、挿絵によるヴィジュアルでモダンな紙面」の内容分析や意味も含めて検討すべきだが、ここでは吉屋のテキストにのみ集中して検討する。『戦禍』についての分析に入る前に、まず、吉屋信子の小説の中に現れている上海・支那イメージについて見てみよう。

Ⅲ. 吉屋信子小説中の「上海・支那イメージ」⁽¹⁰⁾

幾つかの吉屋信子小説中の「上海・支那イメージ」テキストについて予め検討しておく。『良人の貞操』（1937年）では次のように記されている。

……「莫迦だなあ、上海なら日本人街で寿司も食えるぜ」——誰が上海のお寿司なんて——と思ったのか

……上海の南京路の花店で準吉が買った温室堇の籠だった。それに

(8) 尼港事件は、シベリア出兵中の1920年（大正9）3月から5月にかけて、ロシアのトリヤピーチン率いる露中共产バルチザン（遊撃隊）によって黒竜江（アムール川）の河口にあるニコライエフスク港（尼港）の大日本帝国陸軍守備隊（第14師団歩兵第2連隊第3大隊）及び日本人居留民が無差別に虐殺された事件。

(9) 済南事件は1928年（昭和3）5月3日中国山東省済南で、日本の権益確保と日本人居留民保護のため派遣された日本軍（第二次山東出兵）と、北伐中であつた蒋介石率いる国民革命軍（南軍）との間に起きた武力衝突事件である。

(10) 引用文における漢字の旧字体は新字体に改めた。仮名遣い、送り仮名は原文のままとした。

水〔永——引用者〕安公司静江が買って貰った支那の花嫁花婿人形の
一対——

「静ちゃん面白かったの？」

母がたずねると、「とってもおもしろかったわ。支那の人がいっぱい、
お家の柱が赤いのよ、そこで支那料理食べたの。そいからおじちゃん
と人力車に乗ったの、支那人の車屋さんよ」……（長谷川 2002, p. 34）

ここでは、子どもを媒介にして「上海はとっても面白い」、「人がいっぱい」、「人力車に乗る」というパタン認識が登場するが、吉屋のシャンハイ・イメージは、こうした大衆が共有しているようなものを端的に反映しているところに特徴がある。逆に、そうでなければ吉屋作品は大衆性をうることはできなかった。

この点は、『蔦』（1940年）についても同様である。

「ところで、僕のなりゆきを心配した伯父が、上海で小ちやい貿易の
商事会社をやつてゐるんで、そこへ呼んでひとつ働かせて、金儲けの
有難さを覚えさせようてんで、呼ばれて、上海へ行つたんだ——」

「ああ、それで、上海」

「まあ、上海つてところは、いはば東洋のモロツコさね、ちよいと始末
の悪いことをすると、逃げてゆくことさ——そこで伯父の仕事の秘書
みたいに使はれてみたいが、ちつとも、そこの仕事に興味は持てない
し——夜は人並にガーデンブリツヂを渡つて、ダンスホールへ行つて
見ても、面白くない、ちつとも——」

……

「どうしてつて——上海さ——ハハハ」

「そして、ダンスホール？」

「それが、女とをどるなんてつまらん——それで、伯父が上海芸者を
ひかせて妾にして——そいつに出させてゐる……」（吉屋 1940, pp.

72-273)

「上海で金を儲ける」, 「東洋のモロッコ」, 「逃げる場」, 「上海芸者」であつて, 「ガーデンブリッジ」に「ダンスホール」といった, 典型的パターンを繰り返している。おそらく, こうした吉屋のシャンハイ・イメージは, 一般に流布しているものの反映として意味をもつ。

では, 結婚など, 女性の問題が鋭く問われる状況設定においてはどうか?

『女の教室』(1947年)は, 「支那」や「朝鮮」という表象が, 「日本の女性」の「優位性」を証明する素材になっている。

日本よりも, はるかに多い, 四億の人口の支那大陸に, 人口百万対, 僅に十二人の医師とは, 皆も気の毒がつた。

「ホウ, それは少ない, 日本では, 人口百萬に付き, 八百五十人弱の割合でしたかな, 医師一人当たり人口千二百, お国では, 人口九万人に一人の医師では, 貴女なぞ, 実に貴い存在と, これからなられるのですな」と博士は, 彼女の前途を祝した。(吉屋 1947, pp. 135-136)

……

半島の若い女性も, 今は文化に浴し教育も受けて, なかゝ聡明になつてゐます——だが, 桂玉は環境上からも, 無教育で無知で——その上, 少し魯鈍な生れ付きでさへあるのです——僕も, どうにかして, あれを妻として, 教育し救ひ上げようと, ながらく苦心しましたが……さうした事がなかゝたやすく出来得るものではありません……

(pp. 215-216)

「支那では, 医者が少ない」, 「支那の女性は無教育, 無知である」といったパターン認識の存在は, では翻って日本女性の置かれた状況はそこにどのような反映するののかということが当然気になるわけだが, そうした「他者」

に吉屋が見出すのは「かつて遅れていた日本」に過ぎない。

吉屋信子の処女作品集『花物語』（1921年）の「水仙」は、老大国のかつての華やかさへの懐かしさ、そして、亡国した支那少女に対する哀れな抒情が溢れる作品である。彼女はこの少女小説で名を挙げた。

父が北京の、あの小さい掘割のふちの公使館にをりました頃、私もあの都に暫く住みました。北京は御存じのやうに西紀千四百二十一年から清朝の帝都でございましたゆゑ、有名な聖廟、寺院、大塔やあの名高い八匹の騎馬を並べて壁上を走らせることが出来るといふ北京城の厚壁も、今ものこされて哀れになつかしい老大国の過去の栄華の宏大な跡を語つてゐるのでございます。（吉屋 1974, p. 65）

……北京城内の市街を見渡せば支那特有な大陸的な沈静な空気は、仄に匂ひわたるやうな玉虫色の薄絹に拡がつて、……（同, p. 66）

そと黒髪を梳るとて、あやまち落せし翡翠の小櫛は泉の水底玉藻を乱して永久に沈んで、亡国の哀歌を奏づるのではないでせうか。かうした空想も思ひうかびます。（同, p. 70）

……

こうした吉屋の上海イメージは彼女のルポルタージュにいかに反映しているのか。

IV. 『戦禍の北支上海に行く』における上海イメージ

以上を前提に、上海の現場のルポルタージュである『戦禍の北支上海に行く』の言説を検討していこう。

吉屋は9月23日夕方上海に着いたが、安全のためにすでに上海を占領している日本の駆逐艦に守られ船で一夜を過ごし、上陸したのは翌24日である。上陸すると、早速「不潔」イメージが連発反復される。言うまで

もなく、近代日本人の中国認識の基本パターンである。

IV-1. 不衛生について

大都市である上海が、ロンドンや、パリなどと同様に、必然的に衛生問題が生じるのは当たり前なのであるが、その非衛生的イメージ（「不潔」）は、上海のイメージとして強烈に登場している。これは吉屋だけの特徴であるとはいえないものの、事実上、戦時の上海を訪れている彼女の視線は「衛生」と「細菌」との連想をともなう街を眺めている。

「支那の土も黄色いが、また従つて水も黄色い。まるで、泥水のドロ、と流れゆく、その名も黄浦江を、船は遡る。」（長谷川編 2002, p. 107）

「上海は今市街そのものが、すでに戦陣の内と覚悟して、自給自足の食料も用意し、それに上海特有の流行病に対してのクレオソート、……」（同, p. 108）

「舷梯からの直ぐのところに、石竹色に澄んだ消毒液の洗面器が置いてある。私たちはそこで手を浄める。この石竹色の消毒薬は、軍艦だけではなく、上海の公の場所には皆用意してあつた。今上海は戦争の弾丸と、そして眼に見えぬ細菌の災を受けぬように人々は用心し合つてゐる。」（同, p. 148）

「……但し上海の水も、北支同様うつかり一雫も飲みくたせない、沸かしたものを以外。だから用意の水筒が役立つて来た。」（同, p. 121）

最後の、「水が飲めない環境」とあるという点は日本との著しい違いである。日本人の多くがこれを受け入れることはなかなか容易でない。また、上海の描写が「北支」との対比で描かれるところに吉屋の特長がある。女性作家としての上海への視線においても、その筆から従来の上海に対する常套句、「不潔、流行病が多い、遅れていて、啓蒙すべき」といった差別的

言辞を同じように反復させている。こうした点での特殊女性的特徴を抽出するのは、やはり少し難しい。

IV-2. 戦時下上海について

上海独特の風景を想起させるものとして黄包車などがある。吉屋の上海描写には、戦時中であることによる、黄包車の流れる平時との落差の感覚が色濃く反映されている。

「市街が敵味方の対陣圏内」という点も、「上海戦地気分」の大きな特徴であることが描かれるが、平時上海との対比はいつそう戦時の寂漠たる光景を現出させている。

私たちが、この戦乱の巷上海に於いての唯一つの身体の置き場所となる建物は、このアスター・ハウスなのだつた。/北支の風雲巻き上つて、続いてつひに、この上海も砲火の巷となるまでは、こゝ共同租界に英人経営の一大ホテル、ならびに社交場として、先日支那の盲目爆撃の犠牲になつたカセイ・ホテルや、パレス・ホテルと並び称されて、上海旅客案内記にも記してある、高級ホテルだつた。/……だが、なんといふ寂しい、虚の光景であらう——客を千人くらゐも泊められる、この大きなホテル内に、今僅に日本人が二三十人あるだけで、物音一つせぬ静けさ、寂しさ……まるで、城主の滅びし跡の古城へ足を一歩踏み入れた心地だつた。……（長谷川編 2002, pp. 116-117）

そうした上海に、日本の女性であることが特異に映る光景がこんな風にも描かれている。

そこへ、私たちに熱いコーヒーをはこんで来られた洋装の一女性が、驚き顔で、「まあ、よく出かけていらつしゃいました。上海に戦争が始

まつてから、内地から居留民として帰つて来たのは、女では私が八月三十日に唯一人、それも私は、まあ、特別、警察で許されて、上海へ戻つて来られたのでした。それから、内地から入つた女のひとでは、貴女が最初の一人ですよ」と言はれて、心細いやら、勇ましいやら、思はず飲み込んだコーヒーの味が苦かつた。(長谷川編 2002, p. 120)

そうして女性のいないことが上海のイメージにやや奇妙な印象を与えるのは、「シャンハイは女の街」であったこととの対比の中で表象されているからである。

次のような光景も、そうしたシャンハイ・イメージのステレオタイプとの対比の中でむしろ際立つ寂漠とした感覚を呼び起こすものである。

その灯も、たゞ最小限度必要なだけ点されて、そこに続く、ダンスのホールに使つてみたらしい奏楽台にピアノのぼつんと残つてゐる大広間が、ずうつと暗いのも、全くたゞならぬ光景だった。上海戦の直前まで、タキシードや夜会服の異邦の男女が、シャンパンに酔うてタンゴを踊つた幻も浮かぶやうな、そのホールは、たゞ薄寒くがらんどうで、そのこつちのラウンジの小さい灯影に、戦地気分の日本人が少し卓子を囲んで、ちぐはぐな乏しい食料で出来たお皿に向かつてゐるのだつた。(長谷川編 2002, pp. 142-143)

「タキシードや夜会服の異邦の男女」はシャンハイの華のように配置され、「戦地気分の日本人」が描かれる。さらに、次のような「何か日本人として、いやな感慨無量」と吉屋のいう感情が、いかなる性格のものであるのかを解析していくと興味深い。

「灯火キラ、と空に映じて」嘲笑されているかのような「暗黒」の日本人は、吉屋の目にはやはり無条件に誇らしい存在と映っているわけではない。かつて「不夜城」と言われていた上海は急にさびしい「空城」となった。

上海に滞在した経験のある吉屋にとってそれは大いなる驚きであった。租界の象徴である「ダンス・ホール」, 「ガーデン・ブリッジ」も暗い影のしたに置かれていたからである。ただ、その影とはいったい何であったのか。

ガーデン・ブリッジの袂の兵隊さんの影も闇に没して見えず、しいんと静まつてゐる。たゞ、その暗い橋一つ越えた向かうの、旧英租界から奥の仏蘭西租界へかけての街の灯は、こちらの暗黒を鼻先で嘲る如く、灯火キラ、と空に映じてゐた。何にか日本人として、いやな感慨無量のものである。そのガーデン・ブリッジに背を向けて、暗の共同租界の舗道を辿ると、……（長谷川編 2002, p. 145）

市街を一回りしたので、ついでにガーデン・ブリッジを越えて、仏蘭西租界へかけては、支那の避難民が百二十万人も流れ込み、そのうち五十万は寝るに家なく、お金もない貧民なので、うつかり日本人が入つたら最後、ひどい目に遭ふと言はれてゐる。先達、日本人が二人、支那の暴民に殴り殺された事実もあるらしい。さうなると、一寸二の足を踏んだけれど、自動車運転の江上氏が大丈夫と保証なされるので、武官室の印のお陰で橋の警戒陣を突破し、河向うの租界へ入つた。……自国飛行機の爆撃で、たくさん支那人の死んだ大世界の前も、さすがに今は片付いてゐる。も一つ爆弾の落ちた百貨店永安公司是、板戸で全部閉めて、閉業してゐた。私も、この春上海へ遊びに来た時は、この店で支那人形を買つたので、少し感慨無量だつた。……自動車を置いたまゝ、舗道を歩き続けて行くと、その傍に黄包車、橋のあつちの日本人勢力地帯には影も形も見せなくなつた黄包車が、その辺にたくさん集まつてゐた。その黄包車の挽子の支那人は、私たちを日本人と見て、何やら口々に言つてゐるらしい。なんと悪口言はれたか、支那語がわからないから、腹も立たない。でも気味が悪かつた、彼等の眼はあり、と反感を示してゐた。

私たちは足を急がせた、その前を一台の黄包車が走り出した。その車の後に、赤ペンキで太々と打倒東洋鬼子と書いてあつた。

支那人は自分は西洋にすんでゐるつもりか、日本人をだけ、東洋人（トンヤニイ）と称してゐる。だから、今の黄包車の背後の赤ペンキの文字は、日本人は東洋の鬼也の意なのだ。私はその文字を見た刹那、頬が硬ばつて、苦笑も出来なかつた。そこで、我等東洋の鬼子連は、自動車を走らせて、ガーデン・ブリッジへの帰り路を急いだ。

私は平和恢復の後は、再び上海へ来よう、そして、あの黄包車をつかまへて乗り、打倒東洋鬼子のペンキの文字を、親愛東洋女神とでも書き替へさせようと決心した。（長谷川編，2002，pp. 178-181）

吉屋によるこうした状況の描写は、生々しく当時の空気を伝え、女性作家らしい観察眼が生きている。たとえば、「私たちは足を急がせた、その前を一台の黄包車が走り出した。その車の後に、赤ペンキで太々と打倒東洋鬼子と書いてあつた」「打倒東洋鬼子のペンキの文字を、親愛東洋女神とでも書き替へさせようと決心した」という下りには、吉屋の状況への女性的反応がはっきりしている。

こうした吉屋の「支那人」への視線は、次の『愛国女塾』の教室で拾った少女の作文の「女子教育」をめぐる個所においても遺憾なく発揮されている。

IV-3. 『愛国女塾』の教室で拾った少女の作文について

『戦禍の北支上海に行く』の「支那女学生の試験答案」という節によると、「敵軍が籠つてゐたのを、日本軍が追ひ払つて占領した、上海昆山路の愛国女塾の無残な跡は、私たちが眺めて通つた。」（長谷川編，2002，p. 182）という「愛国女塾」があった。「昆山路」という具体的な路名を調べてみると、上海の虹口に確かに「昆山路」という路名がある。その地域でもっとも有名なのは「昆山路 135 号 景林堂」であり、かつて宋美齡はこの「景

林堂」で洗礼を受け、その後「景林堂」の唱詩班に参加して、普段から礼拝する場所であった。この『戦禍の北支上海に行く』という本の中には、蒋介石と宋美齡に対する攻撃が夥しくあり、当時戦禍によって焼けた学校も数多くあった。

女性としての視線は、次の「『愛国女塾』の教室で拾った少女の作文」において顕著となる。とりわけ、それが日本における吉屋の読者層と重なるところがあるため、実に興味深い。当時の日本の同世代の少女たちと上海の少女たちとが、いかに異なる意識でいたのかを如実に物語るのである。

我对日作战にて唯一の勝利を博するの途は戦期の延長、即ち持久戦なり。凡そ物資欠乏の国家は戦期の短を利となし、物資豊富の国家は戦期の長期に亘るを利と為す。欧洲大戦の如き比較的物資欠乏の独塊は開戦より二年以内に休戦なせば、当然勝利を得て、ベルギー、セルビヤは完全に割取され、英仏の植民地の大部分は独塊に割譲されたるに、戦期が四年四ヶ月の長きに互りしたため独塊は勝利を博することができなかつた。故に我等は須らくこの決心を以て対処すべきである。/且つ日本人の科学知識は独に遠く及ばず、財力また然り。ただ一時の準備を為したるに過ぎず、故に我国はこの方針を以て日本に対すれば勝利を得ること確實なり。(長谷川編, 2002, p. 183)

この吉屋が拾った「答案」の課題は、「抗日の基本方案」というものであった。吉屋は、これを一読して、「いたいけない女学生少女の心に、人倫や婦徳の道を教えるよりも、隣国日本への猛ましい敵愾心と反抗精神をギシリ詰め込むのが支那の女子教育だった。なんといふ非人道的な不具的な呪われた女子教育！ しかも、少女の白紙の心は、その呪われた教育に盲ひていったのだった」(同, p. 182)、と記するのであるが、皮肉なことにそれはその直後に日本全体を覆う少女たちの運命と重なり合うものとなる。

日本人にとって戦時上海の経験は、その後によって来る自分たちの経験

に他ならなかった。それは女性にとっても同様なのであった。

女学生の初級といへば、宝塚、松竹の少女歌劇のスターを熱論する年齢頃なのに、支那の彼女らは、抗日熱論なのである。その点一寸考えずにはいられない。思えば、私ら日本の女性は、今まであまりに、隣邦支那の女性へ無関心であり過ぎはしなかったか？（同、p. 183）

ここでの吉屋の指摘は、鋭い女性の感性が見出したものであるように思える。「隣邦支那の女性へ無関心であり過ぎはしなかったか」という疑念は、現在でもなおそうした成熟した隣邦中国への視線の稀薄な中であって、実に貴重な視点である。だが、それはなぜか「武器なき抗日転向戦」ということになってしまう。

抗日の黴菌を撲滅し、一切を清算させて、日支の永久の共存共栄の礎を新に地に打ち込むために、皇軍は北支、南支の山に野に河に、流血の戦いに男の生命と生涯を捧げ尽しているを思えば、日本の女性も、武器なき抗日転向戦を、支那の女性へ機会あらば働きかけてゆく意思を持たねば、申しわけがないと、しみじみ思つた。（同、p. 184）

この記述からしても、長期に亘り相互のコミュニケーションが断絶されるような戦争状態を、吉屋は想定してはいない。いずれ終わるといふ戦争への楽観は、この「答案」の筆者である「愛国女塾の優等生高彩英嬢」への呼びかけで結ばれている。

おそらく、吉屋による「高彩英嬢」のイメージの提示は、「女性」という視線からシャンハイ・イメージを議論する、実に格好の素材となる。というのも、吉屋のこの「高彩英嬢」への判断の枠組みは、日本女性そのものの置かれている状況を、吉屋がどう考えているのかを端的に反映しているともいえるからである。

さらに言えば、「愛国女塾の優等生高彩英嬢」が、毛沢東の持久戦論⁽¹⁾発表以前に同じ議論をしているということも興味深い。同時に、日本にもそうした可能性を理解する素地があったのだということ、それも女性ならではの「持久性の感覚」に裏づけられているかのように思えることも一考に値する。

この吉屋の記述をめぐって、先にも指摘したように高崎は次のように述べている。「これが吉屋信子の結びの言葉である。だがあえてよけいなことをいわせてもらえば、吉屋信子の感想はこれだけなのか、ということだ。中国の女学生とくらべ、日本の女学生の社会的・思想的視野の狭小さや幼児性について、彼女はなにも考えることがなかったのだろうか。日本の女学生たちに体質化されている非現実的な少女趣味は、実は彼女にも重大な責任があることに気がつかなかったのであろうか。日本の女性が中国の女性と対等に話し合うことができるためには、まず吉屋信子自身の文学観を根底から変えなければならないはずなのだ。だが、そのことについて、彼女はなにも述べてはいない。それから一年の後、彼女は「ペン部隊」の一員として三度目の従軍をすることになった」（高崎 1995, p. 61）。

「中国の女学生とくらべ、日本の女学生の社会的・思想的視野の狭小さや幼児性」、
「日本の女学生たちに体質化されている非現実的な少女趣味」という問題への反省は、たしかに、戦時下上海の現実を前にした吉屋のテキストに問われてくるところだろう。それは、現在にも通じるところがある。

さらに、次の「支那の女の巡査」は、女性の視線が反映し、女性作家ならではの感覚を発揮しているという意味でも、興味ある記述となっている。

IV-4. 「支那の女の巡査」について

支那といふ国は町々に皆厚い城壁を回らして、さうして敵のくるのを防いだといふ、昔から実によく戦争ばかりして来た国だといふこと

(1) これは毛沢東が一九三八年五月二十六日から六月三日にかけて、延安の抗日戦争研究会でおこなった講演である。

がわかり、支那の民衆は気の毒だと思はずには居られませんでした。さうしてこの北平に着きますと、此処はその時もう日本軍のお陰ですつかり平和になつて居りまして、あすこには戦がございせんでしたので、広安門の辺に二十九軍が立籠つて、門を閉めて門の中に日本の兵隊さんを少し入れて打つたりした卑怯な跡がございせんですが、それも間もなく追ひ払はれて、私の参りました北平は、日本居留民の籠城も解けて、実に平和でございまして。支那人なども大部分の人が平気であるいて居りました。北平の東の門に照陽門といふのがございせんが、その門の所には女の巡査が居りました、この女の巡査がスカートを穿いて上にはまあ男と同じ詰襟の上着を着て保安隊のやうな帽子を被つて居るのでございせん。門を通過する日本人は調べられませんが支那人は皆調べられる。便衣隊などが入つて来るといけませんからマツチや大根を持つておりまして、何でも皆一応調べるのでございせん。さういふ時、女の身体検査は女の巡査がいたして居りました。それを見て、支那には女の巡査が居たりして女が進歩的な国だと思ひましたがところが、他の場所へ参りますと、その反対に女の乞食が沢山居るのでございせん。巡査と乞食とどういふ関係でございせんか迎も沢山居りまして、謂はゞ敵国の私達にお金を呉ゝと並んで手を出す。やらなければ自動車の窓にぶらさがる程居るのでございまして、それにはちよつとびつくりいたしました。支那が日本と戦ふのも不合理か存じませんが、かういふ女の乞食の沢山居る国では先づ、戦争などはあと回しにした方が宜かつたのだと感ぜずには居られませんでした。……（長谷川編，2002，pp. 222-223）

「女の巡査と女の乞食」とが「進歩と貧困」との対比に使われるという視線の存在は、吉屋のルポルタージュの特徴をよく示している。観察者が女性であるという大前提は、日本社会においてもそうであるように、常に「複数の視線」の存在が意識されている。ジェンダーの要因が異なる社会への

理解に重層性をもたらすのは、そうした「複数の視線」の所以に他ならない。日本における一般人女性が、自ら発する声をあまり持ちえなかった時代において、異なる世界を大に見聞しつつ、なお女性であることから逃れようのなかった吉屋の記述は、当時の中国社会への理解と誤解のそうした複雑性を予め胚胎しているという意味でも貴重である。

V. おわりに

以上、具体的に吉屋のテキストを検討してきた。当然ながら、その「他者認識」の多くは、同時代の日本に共有されているものの反映であった。さらにいえば、一語で「戦時下」と纏めてしまうと大雑把にすぎるのであろうが、1937年7月7日の盧溝橋事件後のいわゆる「日中戦争」中の上海イメージはどのようなものとなったのかを検討する場合、多くの作家たちが新聞や雑誌のレポーター、特派員となって戦場へ赴いたことに着目しておくことはきわめて重要であり、メディアによる戦争への欲望がそこに凝集されているといえよう。くり返すが、作家たちは中日戦争に言葉を与えイメージ化していった。それを消費することによって、当時の日本社会全体が戦争に動員されていった。

少なくとも、上海戦や南京戦あたりまでは作家と軍とは直接の関係はなかった⁽¹²⁾、という点にも着目しておく必要がある。メディアによる作家の活用が、軍による作家の活用を促したのだともいえるが、当初その多くは男性作家であった。予め雑誌特派員として華北や華中の戦場の視察や後方基地の慰問などに出かけていた吉屋信子や林芙美子など女流作家たちも、その後軍に活用されるようになっていく。

作家たちの視線が、比較的率直に「他者」を「敵」としてとらえていく

(12) ところが、徐州戦のあと1938年の夏に始まった武漢攻略戦の際に編成された、いわゆる「ペン部隊」以後、従軍作家たちのほとんどが軍との関係をもつようになってしまった（高崎1995）。

ようになるのは、「われら」と「かれら」とに明確な線を引かざるを得ない戦場においては当たり前である。「雑誌特派員」の目では両義的に映っていたものが、「従軍作家」の目にははっきりとした敵味方の一線が、言葉によっても構築されていく。その意味でも、吉屋のテキストの変容を探っていくことには大いに意味がある。

「中国の女学生とくらべ、日本の女学生の社会的・思想的視野の狭小さや幼児性」, 「日本の女学生たちに体質化されている非現実的な少女趣味」の問題と、こうした吉屋の現実自体への空疎な認識は相通じるところがあるのかもしれない。これをさらに分析していくと、おそらく日本におけるジェンダーの問題を掘り下げる別の契機となるのではないかもしれない。日本の女性は現実自体への空疎な認識しか持ちえない「構造」の存在が、そこで明らかになるだろう。

「女の眼で心で見て感じる記事」を書こうとする吉屋が、戦時下の上海で眼にした風景は、実に「寂しい」, 「虚の光景」であった。同年春に吉屋が上海に行ったときの風景, 「タキシードや夜会服の異邦の男女」, 「シャンパンに酔うてタンゴを踊る」などは、眼前の「今僅に日本人が二三十人あるだけで、物音一つせぬ静けさ、寂しさ」という雰囲気になってしまった。「支那の避難民が百二十万人も流れ込み、そのうち五十万は寝るに家なく、お金もない貧民……」といった、彼女の目にした現実、前回上海に来たときに、百貨店永安公司⁽¹³⁾で人形を買ったことなど、まるで幻であったかのように感じさせたに違いない。「廢墟と化せし支那の最高学府の残骸」を見ながら、「アメリカは支那が可愛いんでせう?」「日本は独立でどんどん大学を建てるから、可愛気がなくて、憎まれっ子なんでせう」と記す、その一方で、フェミニストである彼女の「支那人を人間とも思わぬらしい外人」への憤怒とともに、「鬼畜のような支那兵」に対する憤怒、そして支那兵の母への呼びかけ声も、「世界地球上の人類を生む(母)たり得る女性、

(13) 当時上海の四大百貨店(永安、先施、新新、大新)の内の一つである。

国の東西を問わず、国境を越えて、われら女性は手をつないで、団結し、不正の武力と暴力を止め、地に平和を築き上げよう。たとへ、百年の後の夢なりとも、この理想に向って地球上の女性は進むべきだと思う」と言った強い願望も、後の南京での日本兵たちの所には届いていなかった。

吉屋が提示する言葉によるイメージの乱射は、日本女性が戦時下上海を形象化していくことに大いに貢献していることは事実だろう。「打倒東洋鬼子のペンキの文字を、親愛東洋女神とでも書き替へさせようと決心した」、「われら如き脆弱な女性といへども、ペンを劍に代へて國を愛する」、「當局者は国内宣傳に、その神経と智慧を振ふべきではなからうか」、「支那の民衆と戦つてゐるのではなく、支那自身を滅す政權を、東洋平和のために」、「日本の今戦ふ姿だつた。そして敵に勝ちゆく努力の烈しい力の姿だつた」、「東亜の平和」、「彈丸に代る一つの平和的努力だと思ふ——それは筆によつて、演劇によつて、美術によつて、映畫によつて、科学によつて——あらゆる文化的事業によつて——協力されて行けよう——支那へのこの文化的侵略こそ、英米が、狡猾なほど、いつしか支那へ巧な平和的侵略を行なひ得た一つの原因だ」といった、吉屋の数々のプロバガンダ言説も、その倒錯を矯正して女性性を前面に出した、「きつと日本の女性も支那の女性も、国境を越えて、女として、母として、妻として、必ず東亜の平和の為に結びつく日が来るのを祈らずにはおられません」、というかたちの収束点をもつのである。

「吉屋文学世界」の視線からすれば、それは一つの虚偽と錯誤に他ならないはずなのが、その虚偽と錯誤において凝視された「上海」があったのもまた事実である。「こんどは日本へ生れておいでなさい」と何回も記している中国人への呼びかけは、吉屋の「共同幻想」にまるごとからめとられた精神と現実への空疎な認識の記録としても読める。こうした「幻想」を拡張しているという意味では、吉屋信子は日本人のシャンハイ・イメージのある種の傾向を増幅していると考えられる。

今後さらに、当時の吉屋のテキストの掲載された雑誌『主婦之友』本体

の「写真、絵画、挿絵によるヴィジュアルでモダンな紙面」の内容分析や意味も含めて、当時の日本女性のシャンハイ・イメージを総合的に研究すべきであるが、次の機会を期したい。

【参考文献】

- 岩淵宏子・北田幸恵（2005）『シリーズ日本の文学史⑥はじめて学ぶ日本女性文学史 近現代編』ミネルヴァ書房
- 板垣直子（1987）『婦人作家評伝』吉田精一監修『近代作家研究叢書 56』日本図書センター
- 岡野幸江他共編（2004）『女性たちの戦争責任』東京堂出版
- 金井景子（2004）「報告が報国になるとき——林芙美子『戦線』、『北岸部隊』が教えてくれること」『国文学解釈と鑑賞』別冊
- 亀山利子（1981）「吉屋信子と林芙美子の従軍記を読む——ペン部隊の紅二点」『銃後史ノート』復刊二号。
- 北田幸恵解説（2002）吉屋信子『戦禍の北支上海を行く〈戦時下〉の女性文1』ゆまに書房
- 北田幸恵（2004）「女性解放への夢と陥穽——吉屋信子の報告文学」岡野幸江他共編『女性たちの戦争責任』東京堂出版
- 駒尺喜美（1994）『吉屋信子：隠れフェミニスト』鶴見俊輔他共編『シリーズ民間日本学者 39』リプロポート
- 小林美恵子（2004）「ペン部隊」『女性たちの戦争責任』東京堂出版
- 高崎隆治（1995）『戦場の女流作家たち』論創社
- 田辺聖子（1999）『ゆめはるか吉屋信子』上下二巻朝日新聞社
- 谷光隆（2007）「支那苦力（特に上海に於けるもの）（上）」『愛知大学国際問題研究所紀要』130
- 長谷川啓編（2002）『戦禍の北支上海を行く〈戦時下〉の女性文学1』ゆまに書房（吉屋信子『戦禍の北支上海を行く』新潮社、1937年複製版）
- 長田幹彦他（1972）『良人の貞操』『大衆文学大系』講談社（吉屋信子「海上日記」『良人の貞操』新潮社、1937年）
- 与那覇恵子・平野晶子監修（2002）『戦前期四大婦人雑誌目次集成』ゆまに書房
- 吉屋信子（1937）「戦禍の北支現地を行く」『主婦之友』。主婦之友社 21 巻 10 号

- 吉屋信子・田中比左良（1937）「戦火の上海決死行」『主婦之友』21 卷 11 号
- 吉屋信子（1937）「皇軍慰問の手紙募集」『主婦之友』21 卷 11 号
- 吉屋信子著編（1940）『蕙』『女流作家十佳選』興亜日本社
- 吉屋信子（1949）『長篇名作文庫(5)女の教室』矢貴書店
- 吉屋信子（1974）『花物語』ほるぶ出版（洛陽堂大正 9 年刊復刻版）
- 吉武輝子（1982）『女人吉屋信子』文芸春秋
- 若桑みどり（1995）『戦争が作る女性像』筑摩書房
- 渡辺澄子（2000）「戦争と女性太平洋戦争前半期の吉屋信子を視座として」『戦時下の文学』インパクト出版
- 渡辺澄子（2000）「戦争と女性——吉屋信子を視座として」『大東文化大学紀要』38 号
- 和田博文他（1999）『言語都市・上海 1840-1945』藤原書店